

K I M A H R A N
金 ア ラ ン

学位の種類 博士（国際文化）
学位記番号 国博 第149号
学位授与年月日 平成25年 3月27日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期3年の課程）
国際文化交流論専攻
学位論文題目 日韓語におけるスピーチレベルシフトに関する対照研究
論文審査委員 （主査）
教授 上原 聡 教授 佐藤 勢紀子
教授 長友 雅美
准教授 北原 良夫
准教授 平 香 織（神田外語大学）

論文内容の要旨

1. はじめに

日本語と韓国語は、語順や格助詞の存在、漢字語の使用など類似点が多い言語として知られている。そのため学びやすい言語であるという印象を受けるが、細部を観察してみると相違点も決して少なくない。本研究のテーマである聞き手待遇法も両言語を対照してみると類似点と相違点が混在している。

日韓語の聞き手待遇法は、聞き手に対する待遇度・丁寧度が文末形式によるスピーチレベル(speech level)で表される点、またそのスピーチレベルが丁寧体と非丁寧体に二分される点で共通している。類型論的な観点から見ると、両言語と語順が同じであるモンゴル語にも、同じ漢字文化圏である中国語にも丁寧体・非丁寧体の区別を明示的に表す形式が存在しない。日本語と韓国語のスピーチレベルは、丁寧体と非丁寧体に二分される点だけでなく、その間でシフト(shift,移行)現象が見られる点においても共通している。

スピーチレベルの間で見られるシフト現象は「スピーチレベルシフト」と呼ばれる。話し手は聞き手との社会的関係や発話状況によってスピーチレベルを使い分けるが、話し手が一連の会話で同一の

相手に対して複数のスピーチレベルを用いることがしばしば見られる。具体的にどのような現象なのか例を示す。(1)は店員と客の会話で、丁寧体から非丁寧体へのダウンシフトが行なわれた例である。

(1) 店員「いらっしゃいませ。今日は、どのようなものをお探しですか」

客「母の日のプレゼントです」

店員「お母さんは、おいくつなのかな?」

客「えーと、45歳です」

店員「お若いお母さんですね。では、こちらのお品などいかがですか」

日本語記述文法研究会(2009:275)

現代日本社会では、店員は客に対して丁寧体で接するのが普通であるが、(1)の下線部では、あえて非丁寧体に切り換えることにより、客との距離を縮めている(日本語記述文法研究会 2009:275)。生田・井出(1983:81)は、丁寧体は相手との心的距離を置く時に用いられ、非丁寧体は相手との心的距離を縮める時に用いられるとした。このように、スピーチレベルシフトは相手との心的距離を調節する手段の一つだといえる。

丁寧体と非丁寧体に二分される複数のスピーチレベルを有する日韓語では、(1)のような「丁寧体から非丁寧体へのダウンシフト」以外に、「非丁寧体から丁寧体へのアップシフト」も見られる。また、表1に示すように丁寧体と非丁寧体を複数有する韓国語では、「丁寧体間でのシフト」と「非丁寧体間でのシフト」も見られる。

表 1. 日本語と韓国語のスピーチレベル

	丁寧体			非丁寧体		
日本語	敬体			常体		
韓国語	hapnita 体	hayyo 体	hao 体	haney 体	hay 体	hanta 体

本研究では、日韓語におけるスピーチレベルシフト現象を考察対象とし、シフトの現れ方の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。スピーチレベルを決定する文末形式を手がかりとし、話し手と聞き手の関係やシフトが行なわれた発話状況に基づいて、シフトした発話の特徴を明らかにする。なお、日韓語でともに見られる「丁寧体から非丁寧体へのダウンシフト」と「非丁寧体から丁寧体へのアップシフト」以外に、韓国語でのみ見られる「丁寧体間でのシフト」と「非丁寧体間でのシフト」も考察対象とし、各言語で見られた特徴を総合して、対照研究を行なう。

2. 先行研究と本研究の目的

日本語におけるスピーチレベルシフトは多様な観点から研究がなされてきた。スピーチレベルが選択されるメカニズム(生田・井出 1983)をはじめ、スピーチレベルの運用とポライトネス理論との関係

(宇佐美 1995, 三牧 1997)、スピーチレベルと終助詞の関係(三牧 1993, 佐藤・福島 2000)やスピーチレベルと〈領域〉の関係(鈴木 1997)による研究が見られ、中途終了発話を視野に入れた分析(宇佐美 1995, 伊集院 2004)も行われた。また、実際の談話に基づいた考察(宇佐美 1995, 佐藤・福島 2000, 陳 2003, 伊集院 2004)、外国人学習者によるスピーチレベルシフト(佐藤・福島 2000)や日本語母語話者の外国人学習者に対するスピーチレベルシフトに関する研究(伊集院 2004)も行なわれている。さらに、日本語記述文法研究会(2009)ではダウンシフトだけでなく、アップシフトにも言及している。

一方、韓国語におけるスピーチレベルシフト現象に関する研究(劉松永 1996, 李正福 2001, Kim Ui-su 2002, Han Gil 2002, 成着徹 2007)は、主体待遇法・客体待遇法・聞き手待遇法の全てを対象とする待遇法研究の一部として取り上げられることが多く、用いられる例文も作例や放送談話によるものが多い。また、韓国語ではスピーチレベルが混用されるという指摘はあるものの、シフトが起こる原因や話し手がシフトを起こすことでどのような効果を狙っているかといった考察は積極的に行なわれていない。

スピーチレベルシフトに関する日韓対照研究として、金珍娥(2002)、申媛善(2007)、李恩美(2008)が挙げられる。金珍娥(2002)は、談話ストラテジーとして日韓語におけるスピーチレベルシフトを分析した研究であり、日韓語でストラテジーに違いが見られると指摘した。申媛善(2007)は、初対面の2人を3回会わせ、時間の経過に伴ったスピーチレベルの使用率の変化に着目した。回を重ねるとともに日本語は基本スピーチレベルが丁寧体から非丁寧体へ変わっていったのに対し、韓国語は3回を通して基本スピーチレベル(丁寧体)に変化がなかったとしている。李恩美(2008)は、ディスコース・ポライトネス(discourse politeness)理論の観点から、日韓語におけるスピーチレベルシフトの様相を分析した研究である。両言語におけるスピーチレベルの使用率は、日本語で「敬体(P) 5.5 : 常体(N) 0.7 : マーカーなし(NM) 3.8」、韓国語では「敬体(P) 5.4 : 常体(N) 1.1 : マーカーなし(NM) 3.5」で、常体の使用率は韓国語の方が、マーカーなしの発話の使用率は日本語の方が高いとしている。以上の先行研究により、日韓語におけるスピーチレベルシフトの様相も少しずつ明らかになってきている。

しかし上記の先行研究は、(i)初対面同士の会話のみをデータとしている点、(ii)「丁寧体から非丁寧体へのシフト」が主な考察対象となっており、「非丁寧体から丁寧体へのシフト」や韓国語で見られる「丁寧体間でのシフト」、「非丁寧体間でのシフト」についてはほとんど言及していない点、(iii)文末形式が聞き手に対する待遇度を表すと同時に、文の種類を決定することに着目していない点が問題点として挙げられる。先行研究がいずれも初対面同士の会話をデータとしている理由は、会話参加者の親密度を統制しにくいためであると考えられる。年齢と性別、社会的立場は客観的な項目であり、実験者によって統制できるものであるが、親密度は主観的な項目であり、客観化するのが難しい。そのため、これまでの研究はいずれも親密度がゼロである初対面同士の会話をデータとしており、その結果、丁寧体が会話の基盤となり、「丁寧体から非丁寧体へのシフト」の様相しか考察することが出来なかった。また、スピーチレベルシフトについては韓国語よりも日本語を対象とした研究が盛んに行なわれてきた。それにより、スピーチレベルシフトに関するこれまでの日韓対照研究は、そのほとんどが日本語を基準とし、日本語に韓国語を当てはめる方法を取っている。そのため、韓国語で見られる

「丁寧体間でのシフト」、「非丁寧体間でのシフト」に注目した研究はほとんどなく、韓国語におけるスピーチレベルシフト現象はその一部しか明らかになっていないといえる。本研究では、これらの問題を解決するために、知人同士の会話をデータとし、「丁寧体から非丁寧体へのシフト」だけでなく、「非丁寧体から丁寧体へのシフト」の様相も考察する。また、これまでほとんど扱われてこなかった韓国語における「丁寧体間でのシフト」、「非丁寧体間でのシフト」も考察対象とし、両言語の特徴を総合し、日韓対照研究を行なう。そして、文末形式が文の種類を決定するという点を踏まえ、シフトした発話を文の種類別に分類し、文の種類が日韓語のスピーチレベルシフトに影響を与えているかどうかを明らかにする。

考察対象は、日本語の敬体と常体、韓国語の「hapnita 体」、「hayyo 体」（以上、丁寧体）、「hay 体」、「hanta 体」（以上、非丁寧体）とする。韓国語には、丁寧体の「hao 体」と非丁寧体の「hanev 体」も存在するが、限定された間柄でのみ使われるため、日本語との対応関係を見出すことが難しいとされ、金珍娥(2002)、申媛善(2007)、李恩美(2008)でも「hao 体」と「hanev 体」は考察対象から除外されている。一方、日本語では「言いさし文」において韓国語との対応関係が明確に見出せないため、「言いさし文」も考察対象から除外することにする。さらに、日本語においては、命令を表す「なさい」や確認を表す「でしょう」のように、形態としては丁寧体であるが、他の丁寧体と待遇度・丁寧度の面で違いが見られる形態は考察対象から除く。なお、本研究では述部に用いられた形式に基づき、各々のスピーチレベルの待遇度・丁寧度を判断するため、述部のない発話文とされる中途終了型発話と名詞句発話は考察対象から外することにする。

データは、映画と自然会話の両方を用いる。映画は作られた会話であるため、自然な会話とは言い難い。しかし、多様な場面や人間関係を分析する上で自然会話にはない利点がある。一方、自然会話は人為的な面が排除されたありのままの言語使用を観察できる。しかし、会話参加者を指定したり、録音のための場面を固定しなければならないため、人間関係や場面の多様性に欠ける。そこで、本研究では、多様な場面、人間関係を観察できる映画と人為的な面が排除された自然会話の両方を使用することで、双方の短所を補うことにする。使用する映画は、日本の映画『いま、会いにゆきます』(2004)、『虹の女神』(2006)、『ハチミツとクローバー』(2007)の3本と、韓国の映画『새드무비(Sad Movie)』(2005)、『미녀는 괴로워(200 pound beauty)』(2006)、『청춘만화(almost love)』(2006)の3本である。自然会話の録音は、基準者を一人決め、その基準者との関係が①年上の男性、②年上の女性、③同年齢の男性、④同年齢の女性、⑤年下の男性、⑥年下の女性となるように設定した。基準者は①,②,③,④,⑤,⑥の6人と一対一で30分ずつ、計180分程会話を交わした。日韓語それぞれ男性2名、女性2名を基準者とし、録音を行なった(日本語:約720分,韓国語:約720分)。録音は3つのテーマを与えた上で行なった。最初の10分は基準者と相手が共同でカードを三角形に積み上げてお城を作る「カード積み上げゲーム」を行なうように指示し、続く10分は一人が板を持って立ち、もう一人がその板の上に紙コップを高く積み上げる「紙コップ積み上げゲーム」を行なうように指示した。最後の10分は自由に話すように指示したが、適当な話題がない場合は小学校から高校までの「学生時代のエピソード」について話し合うように指示した。最初の「カード積み上げゲーム」と二番目の「紙コッ

「積み上げゲーム」は普通の雑談では現れにくい命令文と勧誘文を誘導するための設定で、また録音されていることを意識させないための設定でもある。収集したデータは概ね宇佐美(2007)の「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」に従って、文字化した。

3. 考察結果

3.1 日本語におけるスピーチレベルシフト

まず、丁寧体が基調となっている会話から非丁寧体へダウンシフトした発話は、平叙文と疑問文でのみ見られた。ダウンシフトした発話は、独話的なものと聞き手に向けたものに分けることができた。前者には「感情を表出する時の発話」、「目の前で起こっている事態や状態をそのまま描写する発話」、「瞬時的な発話」(以上、平叙文)、「自問」、「自分の中で情報を模索する時の発話」(以上、疑問文)が該当し、後者には「前の発話とつながりを持つ発話」(平叙文)、「固定された社会的立場から離れ、私的立場で述べる発話」、「相手を非難する時の発話」(以上、疑問文)が該当する。独話的な性格を帯びる発話は、何について述べているかによって独話性に違いが見られた。同じ独話的な発話であっても、聞き手の言動や容姿など、聞き手と関係のある事柄についての発話は独話性が低く、聞き手と関係のない事柄についての発話は独話性が高い。また、聞き手に向けた発話は、聞き手に対する話し手の心的距離の調節で説明できるものとそうでないものに分けることができた。前者に該当する発話は、相手との心的距離を縮める時と、心的距離を置く時に二分される。後者には「前の発話とつながりを持つ発話」が該当する。この発話は、一つの文にまとめることができ、文的独立度(日本語記述文法研究会 2009)による説明が可能なものであった。

次に、非丁寧体が基調となっている会話から丁寧体へアップシフトした発話は、平叙文、疑問文、依頼文、勧誘文のすべての文で見られた。丁寧体へアップシフトした発話は、いずれも聞き手に向けた発話であったが、「改まり度を高める時の発話」、「不同意を表す時の発話」、「同意を表す時の発話」、「褒める時の発話」(以上、平叙文)、「嫌味を言う時の発話」、「話題に距離を置く時の発話」、「相手のスピーチレベルに自分のスピーチレベルを合わせる発話」(以上、疑問文)、「相手を突き放す時の発話」(依頼文)、「言いづらいことを言い出す時の発話」、「ふざける時の発話」(以上、平叙文、疑問文)、「メタ言語表現」(平叙文、依頼文、勧誘文)に分類できた。このうち、「改まり度を高める時の発話」、「不同意を表す時の発話」、「嫌味を言う時の発話」、「話題に距離を置く時の発話」、「相手を突き放す時の発話」、「言いづらいことを言い出す時の発話」、「メタ言語表現」は、話し手が相手との心的距離を明示化するという特徴がある。一方、「褒める時の発話」、「同意を表す時の発話」、「相手のスピーチレベルに自分のスピーチレベルを合わせる時の発話」、「ふざける時の発話」は相手との友好的な関係の構築につながる発話と捉えることができる。以上のことから、常体から敬体へのアップシフトは、話し手が相手に対して心的距離を置く場合にはもちろん、心的距離を縮める場合にも現れることが明らかになった。話し手は、会話の基盤を成しているスピーチレベルと異なるスピーチレベルを用いることで、会話の中から自分の発話を浮かび上がらせ、発話内容をより効果的に表そうとしていると考えられる。

3.2 韓国語におけるスピーチレベルシフト

まず、丁寧体から非丁寧体へのシフトは、「hapnita:P2→hay:C2」、「hapnita:P2→hanta:C1」と「hayyo:P1→hay:C2」、「hayyo:P1→hanta:C1」の4通りのシフトが可能だが、今回のデータでは「hapnita:P2→hanta:C1」、「hayyo:P1→hay:C2」、「hayyo:P1→hanta:C1」のシフトが見られた。「hanta:C1」へのダウンシフトは、平叙文と勧誘文でのみ見られ、「hay:C2」へのダウンシフトは平叙文、疑問文、命令文、勧誘文のすべての文で見られた。「hanta:C1」にダウンシフトした平叙文は、「hay:C2」にダウンシフトした平叙文よりも独話性が強い。それは「目の前で起こっている事態や状態をそのまま描写する発話」や「瞬時的な発話」のように、相手に対する意識が低い発話では「hanta:C1」のみが用いられ、「前の発話とつながりを持つ発話」のように、相手に対する意識が働く発話では「hay:C1」が用いられていたことから説明できる。一方、「感情を表出する時の発話」では「hay:C2」と「hanta:C1」の両方が用いられていたが、これも「hanta:C1」を用いた方が独話性が強い。しかし、聞き手に向けた発話であっても「hanta:C1」が用いられる場合もあった。「続く発話に注意を促す発話」であり、この発話は文末に上昇イントネーションを伴って現れた。なぜ、聞き手に向けた発話で「hanta:C1」が使用可能となるのか。それは「hanta:C1」は「hay:C2」と違い、平叙文と疑問文が異なる形で現れるからである。「hay:C2」の場合、平叙文、疑問文、命令文、勧誘文を同一の形態「-어(-e)」で表す。そのうち、平叙文と疑問文は文末のイントネーションによって区別する。一方、「hanta:C1」の平叙文には平叙形「-다(-ta)」しか用いられない。そのため、文末を上昇イントネーションで発話することにより、他の談話的な意味を付加することが可能であると解釈できる。「hay:C2」へのダウンシフトは、疑問文と命令文でも見られた。疑問文は「自問」や「自分の中で情報を模索する時の発話」といった独話性を帯びるものもあったが、「相手を非難する時の発話」や「確認を行なう時の発話」のように聞き手に向けた発話もあった。命令文はいずれも聞き手に向けた発話で、苛立ちを伴い、相手との心的距離を置いて命令を行なう場合と、苛立ちを伴わず、相手に親近感を表しながら命令を行なう場合の2つのタイプが見られた。勧誘文では、「hay:C2」へのシフトと「hanta:C1」のシフトの両方が見られた。前者は相手の冗談などで和んだ雰囲気や勧誘を行なう時に見られ、後者は相手を仲間と捉えて勧誘を行なう時に見られた。

次に、非丁寧体から丁寧体へのシフトは、「hay:C2→hapnita:P2」、「hay:C2→hayyo:P1」と「hanta:C1→hapnita:P2」、「hanta:C1→hayyo:P1」の4通りのシフトが現れ得るが、今回のデータの非丁寧体の会話はいずれも「hay:C2」が基調を成しており、「hay:C2→hapnita:P2」、「hay:C2→hayyo:P1」の2つのパターンだけが観察された。まず、「hay:C2」から「hapnita:P2」へのアップシフトは、話し手が録音・ゲームをリードする基準者として「メタ言語表現」を発話する時に見られた。「メタ言語表現」は「hayyo:P1」によっても現れたが、「hayyo:P1」の「メタ言語表現」は話し手が女性の時に見られ、「hapnita:P2」の「メタ言語表現」は話し手が男性の時に見られた。「メタ言語表現」以外に「hay:C2」から「hayyo:P1」へアップシフトした発話には、「改まり度を高める時の発話」、「不同意を表す時の発話」、「忠告・説教をする時の発話」（以上、平叙文）、「嫌味を言う時の発話」（疑問文）、「相手を突き放す時の発話」、「催促する時」（以上、命令文）に見られ、いずれも話し手と心的距離を置く発話であ

った。

続いて、韓国語でのみ見られる「丁寧体間でのシフト」と「非丁寧体間でのシフト」の考察結果について述べる。丁寧体間でのシフトは「hapnita:P2→hayyo:P1」と「hayyo:P1→hapnita:P2」が可能であり、今回のデータでは両方とも観察された。まず、「hapnita:P2」から「hayyo:P1」へのダウンシフトは、命令を行なう時にのみ見られた。命令という言語行為は相手に負担をかけるため、相手に対する配慮が必要とされる。そのため「hayyo:P1」よりも待遇度・丁寧度が高い「hapnita:P2」を用いた方が望ましいと考えられるが、実際には「hayyo:P1」が用いられている。その理由について本稿では、「hapnita:P2」が話し手と聞き手の社会的、心理的距離を明示化する「格式体」であるのに対し、「hayyo:P1」は相手との社会的、心理的距離をなくし、相手に親近感や情感的な態度を表す「非格式体」である点から説明した。韓国語では心理的距離を縮める「非格式体」の「hayyo:P1」を用いることで、命令を行なう相手に親近感や情感的な態度を表し、自分の要求を受け入れられやすくしていると考える。「hayyo:P1」から「hapnita:P2」へのアップシフトは、「改まり度を高める時の発話」、「相手を褒める時の発話」、「強い意志を表す時の発話」、「自分の言動を正当化する時の発話」(以上、平叙文)、「ふざける時の発話」(疑問文)、「メタ言語表現」(平叙文、命令文)を発話する時に見られた。以上の発話は、「改まり度を高める時の発話」、「強い意志を表す時の発話」、「自分の言動を正当化する時の発話」、「メタ言語表現」のように相手との心的距離を明示化するものと、「相手を褒める時の発話」、「ふざける時の発話」のように相手との友好的な関係の構築のためのものに分けることが出来た。

最後に、非丁寧体間でのシフトは「hay:C2→hanta:C1」と「hanta:C1→hay:C2」が現れ得るが、今回のデータでは、「hay:C2」が会話の基調となっており、「hay:C2→hanta:C1」のダウンシフトだけが見られた。まず、「hanta:C1」の平叙文は、「感情を表出する時の発話」、「目の前で起こっている事態や状態をそのまま描写する発話」、「瞬時的な発話」のような独話的な性格を帯びるものと、「続く発話に注意を促す発話」、「強い意志を表す時の発話」、「ある事実を断定的な口調で言う時の発話」のように相手に向けたものに分けることができた。前者は「hanta:C1」が「hay:C2」より独話性が強いことが原因だと考えられるが、「hanta:C1」は独話性が強い一方、相手との心的距離を明示化する格式体であるため、「強い意志を表す時の発話」、「ある事実を断定的な口調で言う時の発話」にも用いられる。なお、「続く発話に注意を促す発話」に「hanta:C1」が用いられる理由は前述したとおりである。「hanta:C1」の疑問文は、「相手を非難する時の発話」のように相手との心的距離を置く場合と、「ふざける時の発話」、「相手を配慮の要らない、楽に話せる間柄と捉えている時の発話」のように、相手との心的距離を縮める場合に現れ、相反した現れ方を見せていた。「hanta:C1」の命令文も同様で、「苛立ちを表す時の発話」のように相手との心的距離を置く場合と、「相手を配慮の要らない、楽に話せる間柄と捉えている時の発話」のように相手との心的距離を縮める場合に現れた。非丁寧体の勧誘文はいずれも「hanta:C1」によって現れていた。これは、同形で命令と勧誘を表す「hay:C2」を用いると、曖昧性が生じ得るため、それを回避すべく、非丁寧体の命令文は「hay:C2」で表し、非丁寧体の勧誘文は「hanta:C1」で表すという機能分担が背後に存在し、それがシフトにも影響を与えたと考えられる。つまり、勧誘文を発話する際に起こる「hanta:C1」へのダウンシフトは、話し手の心的状態が反映さ

れたものというより、「hanta:C1」の勧誘形を非丁寧体の勧誘文を実現する専用のものとする韓国語の事情が反映された結果といえる。

3.3 スピーチレベルシフトに関する日韓語の共通点と相違点

3.1 では日本語におけるスピーチレベルシフトの考察結果について、3.2 では韓国語におけるスピーチレベルシフトの考察結果について述べた。ここでは、3.1 と 3.2 に基づき、日韓語におけるスピーチレベルシフトの共通点と相違点について述べる。

まず、日韓語でともに見られた「丁寧体から非丁寧体へのダウンシフト」と「非丁寧体から丁寧体へのアップシフト」における共通点と相違点を以下に示す。

表 2. 日韓語でともに見られたスピーチレベルシフトの共通点と相違点

丁寧体 ↓ 非丁寧体	共通点	(i) 日韓語ともに「前の発話とつながりを持つ発話」、「感情を表出する時の発話」、「目の前で起こっている事態や状態をそのまま描写する発話」、「瞬時的な発話」(以上、平叙文)、「相手を非難する時の発話」、「自問」、「自分の中で情報を模索する時の発話」(以上、疑問文)で非丁寧体へのダウンシフトが見られた。 (ii) 独話的な発話であっても、発話内容が聞き手と関係のある事柄か否かによって独話性に違いが見られる。 (iii) 非丁寧体へのダウンシフトは相手との心的距離を縮める場合だけでなく、相手との心的距離を置く場合にも現れる。
	相違点	(i) 日本語では平叙文と疑問文でのみ非丁寧体へのダウンシフトが見られたのに対し、韓国語では平叙文、疑問文、命令文、勧誘文のすべての文でダウンシフトが見られた。 (ii) 平叙文と疑問文では両言語でともにダウンシフトが見られたが、「固定された社会的立場から離れ、私的立場で述べる時の発話」(疑問文)では日本語でのみシフトが見られ、「続く発話に注意を促す発話」(平叙文)、「確認を行なう時の発話」(疑問文)では韓国語でのみダウンシフトが見られた。 (iii) 日本語では常体で表すものを韓国語では「hay:C2」と「hanta:C1」の2つで表すことができ、独話性がより強い発話では「hanta:C1」が用いられる。 (iv) 韓国語における非丁寧体へのダウンシフトのうち、「続く発話に注意を促す発話」では「hanta:C1」(‘-다(-ta)’)が用いられ、「確認を行なう時の発話」では「hay:C2」(‘-지(-ci)’)が用いられるという形態による使い分けが影響を与えていた。

非丁寧体	共通点	(i) 両言語ともに「改まり度を高める時の発話」、「不同意を表す時の発話」（以上、平叙文）、「メタ言語表現」（平叙文、命令・依頼文）、「嫌味を言う時の発話」（疑問文）、「相手を突き放す時の発話」（命令・依頼文）でアップシフトが見られた。
↓ 丁寧体	相違点	(i) 日本語では「ふざける時の発話」、「褒める時の発話」、「同意を表す時の発話」、「相手のスピーチレベルに自分のスピーチレベルを合わせる発話」のように、相手との友好的な関係を築けるための発話でもアップシフトが行なわれたのに対し、韓国語では相手との心的距離を置く場合にのみアップシフトが行なわれた。

次に、韓国語でのみ見られた「丁寧体間でのシフト」と「非丁寧体間でのシフト」をアップシフトかダウンシフトかというシフトの方向性に合わせて対照を行なった結果について述べる。まず、「丁寧体間でのシフト」における「hayyo:P1→hapnita:P2」のアップシフトは、「改まり度を高める時の発話」、「メタ言語表現」、「相手を褒める時の発話」（以上、平叙文）、「ふざける時の発話」（疑問文）において、常体から敬体へのアップシフトを行なった日本語と類似していた。また、「非丁寧体間でのシフト」における「hay:C2→hanta:C1」のダウンシフトは、「感情を表出する時の発話」、「目の前で起こっている事態や状態をそのまま描写する発話」、「瞬時的な発話」（以上、平叙文）、「相手を非難する時の発話」（疑問文）において、敬体から常体へのダウンシフトを行なった日本語と類似していた。しかし、韓国語の丁寧体と非丁寧体は、格式体と非格式体に分けられ、命令を行なう時には、親近感や感情的な態度を表す非格式体の「hayyo:P1」と「hay:C2」を用いて自分の要求をより受け入れられやすくしている点、「あなたがどう考えようと私はこうする」という強い意志を表す時には、相手との距離を明示化する格式体の「hapnita:P2」と「hanta:C1」を用いる点など、丁寧体間、非丁寧体間で格式体と非格式体による使い分けがなされていた。

4. おわりに

本研究は、これまでデータとして使用されることがほとんどなかった知人同士の会話をデータとし、「丁寧体から非丁寧体へのダウンシフト」だけでなく、「非丁寧体から丁寧体へのアップシフト」も考察対象とした点において新規性が高い。また、既存の日韓対照研究で扱われることのなかった韓国語で見られる「丁寧体間でのシフト」と「非丁寧体間でのシフト」にも注目し、シフトの方向性から対照を行なった点が新しい試みといえる。そして、シフトした発話の分類において、これまで「独話」、「独り言」として処理されてきた発話を、発話内容によって独話性の度合いに違いが見られることを指摘した。また、ダウンシフトが心的距離の縮小を、アップシフトが心的距離の拡張を表すといった先行研究の指摘とは異なり、同じ方向のシフトで心的距離の縮小を表すことも、心的距離の拡張を表すことも可能であることを明らかにした。分析方法に関しては、スピーチレベルが文の種類を決定する点に着目した結果、両言語では文の種類によるシフトの現れ方に違いが見られることが分かった。

最後に、これまでの研究とは違い、日本語のスピーチレベルシフトを基準とせず、日本語と韓国語を個別に考察し、その結果に基づいて対照研究を行なった。その結果、韓国語は格式体と非格式体という区別が韓国語のスピーチレベルシフトに影響を与えていること、また「hayyo:P1」の命令文や「hanta:C1」の勧誘文のように、話し手の心的状態によらない非典型的なシフトが見られることが分かった。

本研究の考察によって明らかになった以上の内容は、これまでの研究では言及されていないものであり、日韓両言語におけるスピーチレベルシフト現象について新たな一面を明らかにしたといえる。

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、日本語と韓国語において共通して見られる、聞き手待遇法としての丁寧体・普通体といったスピーチレベル間のシフトのメカニズムを、談話分析の手法を用いて日韓語それぞれの言語について明らかにし、両言語間で見られる同現象間の異同を体系的・実証的に解明することである。

日本語のスピーチレベルシフトに関する先行研究は多く存在するが、韓国語のそれは限られており自然会話をデータとした実証的なものは少ない。特に韓国語には丁寧体・普通体のそれぞれがさらに2種類の形式によって二分され計4つのレベルが存在するが、韓国語の先行研究では、日本語との対照研究も含めて日本語と同様の大まかな2レベル間でのシフトの分析に留まっている。本研究は、そういった先行研究の問題点を整理検討し、両言語を共通の基準で対照分析する方法を考案した上で、それに基づいて性別年齢差別の日韓語計48ペアの自然会話データを収集し、映画データと合わせて計約35時間に及ぶデータを対象として分析したものである。両言語間のスピーチレベル数の違いについてもシフトの方向性により分類し、対照分析を行った。よってこれまで皆無であった包括的かつ定量的な日韓語のスピーチレベルシフト現象の対照研究を成し遂げており、多くの新知見を得ている。

具体的には、典型的なシフト以外のこれまで指摘されていない機能のシフトが日韓語に見出され、特に冗談を言うときなどの心的距離を縮める機能を持つアップシフトは日本語に特徴的に見られることを指摘した。また、日韓語でこれまで普通体へのダウンシフトの要因として指摘されていた独話性に発話内容が聞き手の領域に属する事柄か否かによる程度の差が認められることを指摘し、それが韓国語における普通体内の2レベルの形式の使い分けの要因としても機能していることを明らかにした。さらに、韓国語には、命令文で非格式形式がほぼ無条件に選択されるなどその使用が文の種類に基づき本来のシフトとは異なるものが存在することも指摘し、それらが行為遂行文の持つ聞き手への負担度の差と多機能形式の曖昧性の解消の原理など他の要因によって説明できることを論じた。

本研究で指摘されたシフトの要因に関するさらに深い理論的な観点からの考察など今後の課題として残る点もなしとしない。しかし、要因が複雑でこれまで体系的に行われていなかったスピーチレベルシフト現象の日韓対照研究を初めて有効な対照分析の方法を考案することにより成し遂げた点、しかも日韓語両言語の大量のデータを用いて綿密な分析をほどこし実証的に検証した点など、高く評価

される。

上に示した本論文の新規性を併せて考えれば、その成果は、執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示すものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。